平 成 ３０年 度（２０１８年度）

事業報告書及び決算報告書

平成３０年４月１日から

平成３１年３月３１日まで

一般社団法人 日本聴覚障害者陸上競技協会

Japan Deaf Athletics Association

JAPAN SPORT COUNCIL
日本スポーツ振興センター
競技力向上事業

スポーツ振興基金
独立行政法人日本スポーツ振興センター

【　目　　次　】

ページ

事業報告書

Ⅰ　当協会と組織運営について　1

Ⅱ　平成３０年度事業計画で定めた基本方針　2

Ⅲ　主な事業報告　2

決算報告書　8

【財務諸表等】

（１）貸借対照表

（２）正味財産増減計算書

（３）収支計算書（2ページ）

【添付書類】

監査報告書

一般社団法人日本聴覚障害者陸上競技協会
平成３０年度事業報告書
（平成３０年４月１日～平成３１年３月３１日）

Ⅰ　当協会と組織運営について

日本聴覚障害者陸上競技協会は、平成14年４月１日の設立以来、わが国における聴覚障害者陸上競技を総括する団体として、社会的責任を果たすとともに生涯スポーツ、競技スポーツ、観るスポーツとしての聴覚障害者陸上競技の普及発展、選手強化を目的とした事業を実行してきました。

発展普及事業の１つに全国規模の陸上競技大会の開催があります。日本聴覚障害者陸上競技選手権大会は平成15年度に開催された前身の第１回日本聴覚障害者陸上競技記録会の成功をきっかけに、次年度以降、年に１度のペースで開催され、平成29年度には第14回目を迎えました。開催地は東京から東北、沖縄にまで広がりました。今後も開催地の幅を広げて、聴覚障害者陸上競技の啓発に努めます。また、株式会社ニシ・スポーツの協力を得て、光刺激スタートシステム（以下、スタートランプ）の開発が進み、国内大会での使用が進むように普及活動を推進しています。

選手強化事業においては、平成20年度は第１回世界ろう者陸上競技選手権大会が初めて開催され、トルコ・イズミール市に選手団を派遣しています。この国際大会出場を契機に国内競技力の向上と選手の発掘に益々力を注ぎ、その成果として平成21年度には夏季デフリンピック競技大会への選手派遣人数が当時では最多となりました。男子ハンマー投で金１個、男子やり投と女子マラソンの銀２個、男子マラソンと女子やり投の銅２個で合わせて５個の素晴らしい成績を収めています。このデフリンピックにおける聴覚障害者陸上競技の啓発を通して、当協会に登録する選手の数が徐々に増加し始めました。平成24年度にはカナダ・トロント市で開催された第2回世界ろう者陸上競技選手権大会に参加しました。男子4×400m リレーにおいて３位に輝き、これはトラック競技種目では初となるメダル獲得でした。また、女子100mハードルで銀メダル獲得、女子4×100mリレーで４位入賞し、この大会でトラック競技での女子種目出場は当協会設立以来、初の快挙でした。平成25年度は、この勢いを保ってブルガリア・ソフィア市で開催された第22回夏季デフリンピック競技大会に派遣しています。男女棒高跳、女子100mハードルにおけるメダル獲得は新鋭誕生ともいえる素晴らしいものでした。しかし、一方で前回大会よりも派遣選手数、出場種目数が増えたにも関わらず、メダル獲得数は前回大会と同様の５個に終わり、男女とも、更に一段と世界を視野に入れた努力が必要なことが再認識された年となりました。このデフリンピックで初めて国際舞台を経験した選手たちが今や聴覚障害者陸上競技を引っ張るリーダー的存在に育っています。このように、当協会では、国際大会ごとに選手強化計画を立て、経験を通して心身共に強くなり、次世代につなげてくれる選手を育成することも１つの役割であると考えています。平成27年度には第８回アジア太平洋ろう者競技大会に参加しました。派遣人数は40名とこれまでの最多数で、参加国の中では一番多くのメダルを獲得し、聴覚障害者陸上競技アジア王者としての意地を見せつけた年でした。

平成28年度より一般社団法人に移行してからは、更なる聴覚障害者陸上競技の発展、夏季デフリンピック競技大会をはじめとした聴覚障害スポーツの知名度向上を一層推進していくために、日本陸上競技連盟（以下、日本陸連）や日本スポーツ振興センター（以下、JSC）、日本障がい者スポーツ協会（以下、JPC）、その他の関係団体との連携強化に力を入れています。企業ともパートナーシップ

協定を結ぶなど、多岐にわたって啓発活動を展開しています。さらに、2020年（令和２年）に日本で開催するオリンピック・パラリンピックの中で実施する予定の啓発運動、そして同年度に開催予定の第４回世界ろう者陸上競技選手権大会などにつながるように、啓発・普及・強化・発掘事業に取り組んでいきます。このような視点に立って、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの後には、多くの聴覚障害者が身近な地域でスポーツができる環境をつくっていくことが、当協会としての役割であると考えています。平成30年度は、平成29年度に引き続き、聴覚障害者陸上競技の更なる振興推進のため、基本方針（Ⅱ参照）を定めて、新たな事業をも含めさらに一層充実した事業を策定しました。

以下の通り、本協会の平成30年度事業計画にて定めた基本方針をもとに報告致します。

Ⅱ 平成３０年度事業計画で定めた基本方針

（１）障害者スポーツ（聴覚障害者陸上）の地域振興の推進をします。
（２）デフリンピック競技大会での競技環境の整備・理解啓発事業を推進します。
（３）競技力向上に向けて選手及び役員を支援します。
（４）２０２０デフスポーツデベロップメントプロジェクトの発足
（５）パートナーシップ協定などに向けて企業・団体等と新たな連携を推進します。
（６）協会の運営体制の充実そして組織体制を強化します。

Ⅲ　主な事業報告

（１）障害者スポーツ（聴覚障害者）の地域振興の推進

平成30年度のスポーツ振興基金助成（大会開催助成）を受け、5月26日、27日に東京都大井ふ頭中央海浜公園陸上競技場において第15回日本聴覚障害者陸上競技選手権大会を開催しました。協賛していただいた企業はありがたいことに前回大会より１社増加の14社でした。25日は夜に開会式を前回と同様、品川プリンスホテルで開催し、東京都知事小池百合子氏の御臨席をはじめ、協賛いただいている企業関係者等多くの来賓の方々にご出席いただいき、大規模なものとなりました。この際に、バックパネルを用意して、協賛いただいている企業のPR協力にも努めました。2020年に計画しているデカネーションについてプレゼンテーションもあわせて行うことで、社会に聴覚障害陸上競技を広く周知することができました。大会当日は、公益財団法人東京陸上競技協会の協力を得て、運営を行いました。ドーピングの啓発にも積極的に取り組み、日本アンチ・ドーピング機構（以下、JADA）より検査員が来られて検体をとりました。今大会は2019年3月にエストニアで開催された第１回世界ろう者室内陸上競技選手権大会の日本代表選考会も兼ねており、ユースデフリンピックに繋げるためのユース枠を設けたため、61名の参加選手のうち、高校生が約８割を占め、今後のユース育成強化につながる大会となりました。さらに、競技力向上事業助成の諸外国チーム招待事業として、アメリカから選手3名、コーチ1名、エストニアから選手1名、コーチ1名を招待し、国内選手の強化だけでなく、国際競技力の向上にも貢献することができました。その成果として大会記録が11つ、日本ろう記録が１つ（女子棒高跳）誕生しました。今後も諸外国チーム招待事業を取り入れながら、更なる国際競技力向上、国際間の関係強化に貢献していきます。

今大会もスタートランプの啓発のために、その体験を通して一般の方にも広く周知をしようという

目的でアトラクションレースを実施しました。日本代表選手、海外選手との交流の機会も設けて、一緒に走ったり、サイン会を行ったりして、子どもたちとのふれあいを増やせるように努めました。このイベント企画は子どもたちやその親に大変好評のようでした。次大会も実施できるように、引き続き企画を検討します。また、今大会の周知のために、HPやFacebookなどのSNSによる広報にも力を入れ、大会前の周知、大会の様子、選手インタビューの動画作成と掲載もまめに行いました。

令和元年度も6月に第16回大会を駒沢オリンピック公園にて開催することが確定しています。参加選手数、観客数、協賛の全ての面において第15回大会を上回ることができるように、引き続き努力してまいります。

味の素ナショナルトレーニングセンターの利用については、トレーニングセンターと契約を結んでいる日本陸連に相談した結果、事前に利用の申請があれば、合宿などでの利用を認めるという方向で利用許可をいただくことができました。令和元年度は、積極的にトレーニングセンターを利用し、日本陸連やトレーニングセンターの研究員の方々との関係をさらに強固なものにしていきます。

（２）デフリンピック競技大会での競技環境整備・理解啓発事業の推進

《第1回世界ろう者室内陸上競技選手権大会報告》

第１回世界ろう者室内陸上競技選手権大会が平成31年３月14日～17日の４日間で開催され、選手16名、スタッフ７名、大会本部役員３名の計26名の日本選手団がバルト三国の地であるエストニア共和国タリン市で熱い戦いを繰り広げてきました。この大会は歴史に残る第１回目の大会となり、昨今、世界中で聴覚障害者スポーツの盛り上がりを受け、新たに開催され、今後ろう者の世界大会として、長きにわたり続けられることと思います。日本ではあまり室内陸上は浸透していませんが、北欧などの国々では寒い冬場にでも練習や試合ができる室内施設が多くあり、大会なども大小問わず盛んにおこなわれています。

日本チームの成績は銀メダル１・入賞14となり、メダルの数は１個と少し寂しい結果となりましたが、多くの競技で入賞を取ることができました。また、棒高跳については、大会前からメダル獲得を期待していましたが、「1競技３カ国５人以上エントリー」という大会ルールで、１位２位を日本選手がとりましたが、残念ながら「ノンメダル競技」となってしまいました。全体的にはロシアやウクライナといった強豪国相手によく頑張りました。

特に今大会には16名中７名のユース世代（高校生）選手を初選出し、世界大会出場し強豪と戦う経験をしてもらい、次世代を引っ張って行って、この経験を生かして、今後の選手生活につなげていってほしいです。４位という結果も多く、あと一歩のところでメダルを逃し、今後の課題としては、その「あと一歩」を強化していければと思います。

また、エストニア現地の大使館の方々はじめ、在住邦人の方々が応援に駆けつけてくれ、とても励みになりました。

聴覚障害者スポーツはまだまだ認知度が低く、障害者スポーツの出遅れとして位置づけられていますが、令和元年度は11月に「第９回アジア太平洋ろう者競技会」が香港で開催され、12月にはイタリアで冬季デフリンピック競技大会も予定されています。少しずつですが、多くの方々に知ってもらい、他の聴覚障害者への勇気と希望を与え、子ども達にスポーツを通じて感動

と勇気を与えられるように当協会も普及啓発に取り組んでいます。これも多くの方々のご理解とご協力、ご支援があってこそ選手たちが競技に集中できる環境が整うと感じております。

◆総合成績 銀メダル１・入賞 14
銀メダル：女子 1500m 岡田海緒選手
4 位入賞：女子 800m 岡田海緒選手
4 位入賞：男子 800m 森光佑矢選手
4 位入賞：男子 60m 佐々木琢磨選手
4 位入賞：女子 4×400mリレー
谷岡真帆・岡田海緒・常盤りお・三反田愛紗
4 位入賞：男子 4×400m リレー
長内智・森光佑矢・高居千紘・佐々木琢磨
5 位入賞：男子 60m ハードル 田邊空選手
7 位入賞：女子 1500m 中村美月選手
7 位入賞：女子走幅跳 上森日南子選手（注 1）
7 位入賞：男子 1500m 森光佑矢選手
7 位入賞：女子三段跳 谷岡真帆選手
7 位入賞：女子 800m 三反田愛紗選手
8 位入賞：女子 800m 土屋文香選手
8 位入賞：男子三段跳 濵口椋選手
8 位入賞：男子 60m 須山勇希選手

ノンメダル・・・3 か国 5 選手以上必要
1 位：女子棒高跳 佐藤湊選手日本ろう記録タイ
2 位：女子棒高跳 滝澤佳奈子選手

※室内大会は初めてですので、今大会の記録はすべて「日本ろう室内記録」になります。上森選手（注１）の記録については、屋外でも日本ろう記録となりました事、追記します。

令和元年度も引き続き、国際大会において世間から注目されるような成績を収めなければならないと考えます。選手たちが次の第24回夏季デフリンピック競技大会に向けて良いパフォーマンスを発揮できるような環境整備、そして円滑な運営ができるように整えていきます。また、選手が活躍することで、知名度の向上と２０２０東京オリンピック・パラリンピックにおいて活躍できる機会の増加につなげるために聴覚障害者陸上競技についての知名度向上・地域の理解促進を図る必要があります。そのために、地域での協働事業も含め、聴覚障害者陸上競技の理解啓発事業をさらに推進します。また、様々な情報を発信するポータルサイト（SNSなど）をはじめ、幅広く情報を提供し、多くの方に聴覚障害者陸上競技の魅力を広めていきます。

（３）競技力の向上

平成30年度に実施した選手強化事業については、表１の通りです。事業の具体的内容については、別紙の報告書をご参照ください。

聴覚障害者陸上アスリートが第23回夏季デフリンピック競技大会で活躍することで知名度向上に繋がり、更に言えば、2020の東京オリンピック・パラリンピックでデフも活躍できる機会が増えてくることを望んでいます。そのため、選手発掘事業を平成31年度も行うとともに、選手育成・強化にも力を注ぎます。また聴覚障害者陸上の総括団体としての頂上の競技会や強化合宿または練習会等を実施して行きます。また、優秀な指導者を配置できるように関係機関などと連携し、コーチ育成強化事業も実施します。平成30年度の課題として残ったのはコーチの確保及び配置についてです。短期間または一時的なコーチではなく、常設帯同コーチの確保に努めていかなければならないと考えております。そのためには、資金集め、もしくはデフ陸上の魅力を更に高めていくことで、トップの方に顧問及びコーチに就任していただくことが重要であると考えています。これまでは合宿の都度に特別講師として招いて指導していただいたが、第24回夏季デフリンピック競技大会での入賞者数、メダル獲得者数の増加を目指すにあたって、選手の実態に合った指導をしていただく必要性を感じています。年間契約を結んで長期的に見ていただけるコーチを発掘することが平成31年度の課題になるであろうと考えます。

事業名	日程	場所
第1回強化合宿	5月5日・6日	熊谷市
第1回フィールド強化合宿	6月9日・10日	大体大
第1回ユース強化合宿	7月25日～28日	神奈川
第2回強化合宿	8月2日～9日	エストニア・タリン
第2回ユース強化合宿	8月11日～13日	大体大
第1回トラック強化合宿	11月23日・24日	国士館大
第3回強化合宿	2月9日・10日	神奈川

表１　平成30年度に実施した選手強化事業

（４）２０２０デフスポーツデベロップメントプロジェクトの発足

2020 年東京オリンピック・パラリンピック（以下、オリパラ）開催に向け、多くの競技団体が様々なプログラムを実施し、普及・啓発に向け活動を行っている様子を目にします。しかし、デフスポーツは、オリパラ属さずそうした活動に深く関与する機会がありません。昨年開催された、ろう者のスポーツの祭典デフリンピックも日本での認知度は２％程度と大変低く、オリパラ教育で使用される読本の中にもデフリンピックに触れる記述は少なく、聾学校の生徒ですらデフリンピックのことを深く学ぶ機会がないのが現状です。

こうした様々な課題に対して、デフスポーツ団体が一丸となり、2020 年に向けデフスポーツの普及、発展、啓発を目指し立ち上げたのが２０２０デフスポーツデベロップメントプロジェクトです。多くデフスポーツ団体のお力をお借りし様々なプログラムを立ち上げて 2020 年オリパラに向けて、デフスポーツを盛り上げていきたいと考えます。今年度は大阪で開催された日本選手権大会にて、聴覚障

害者（T-70）のアトラクションレースを実施する予定で進めてまいりましたが、調整期日が足らず今年度は断念する結果となりましたが次年度に向けて改めて調整を進めていくよう日本陸上競技連盟と協議を進めてまいります。また、2020 年 10 月開催予定の調整を進めています、第 4 回世界ろう者陸上競技選手権大会を競技方法、参加国、参加地域等を変更し「２０２０World Deaf Games DECANATION for the deaf」という名称に変えて実施することで関係機関と話を進めています。この大会は、国別、地域別対抗で男女各 10 種目に一人ずつ計 10 人が 1 つのチームとなって競技を行う形式となっています。この形式だと、参加国や大会期日が抑えられ、予算面や施設借用面でも開催しやすいのが特徴です。大会には日本のユース選手の部や聾学校の商学部を対象としたアトラクションレースなども企画していますので、多くの人が参加でき、それに関わる方々が観戦しやすいように工夫をしていく予定です。平成 31 年度の第 16 回日本聴覚障害者陸上競技選手権大会の海外招聘事業を利用して、プレ大会を計画しています。また、デフスポーツ連絡協議会を通じて、多くのデフスポーツ団体に大会運営に携わってもらい、組織員会には各団体代表が入れるように要請をしていて、デフスポーツ全体でこの大会を成功に導けるように進めています。

（５）企業・団体等と障害者スポーツとの新たな連携への支援

助成金を東京2020オリンピック・パラリンピックに実施するデフスポーツデペロッププロジェクトの事業そして第24回夏季デフリンピック競技大会及び第4回世界ろう者陸上競技選手権大会への関心が高まりつつある中で、関係機関・企業・ 団体等からの障害者スポーツへの支援や連携について相談に応じるとともに、情報の提供、企画提案、実施支援を行い、デフスポーツの振興を推進します。

平成 29 年度後半より、主に平成 29 年 9 月に行われた「第 14 回日本聴覚障害者陸上競技選手権大会」から新たな企業スポンサーを発掘する試みを行いました。おかげで 12 の企業・団体から協賛を得ることができました。その後の各企業の働き掛けを行い、平成 30 年度は、協会ウエアを変更し、株式会社ミズノから協賛を受けることができるようになりました。さらに株式会社クレディセゾンからも本格的に協賛を受けることが決まり、平成 31 年 1 月頃にドクターエアの株式会社ドリームファクトリー、サングラスで有名なオークリーを展開しているルックスオティカ株式会社とスポンサー契約を結ぶことが出来ました。令和元年度は引き続き、株式会社 B&D、ニシ・スポーツの協賛を受ける形を継続し、平成 30 年度以上のパートナーシップ関係を構築することで、協賛を継続していただけるよう契約を結びました。

今後のデフスポーツ発展の為には企業との関係をより強固にし、お互いのメリットになるように協会としても努力が必要です。令和元年度以降も引き続き、協賛企業の募集を行い、JDAA がさらに盛り上がれるように事業展開を行っていきます。

（６）協会の執行体制の強化

平成30年度は平成29年度の反省から、合宿計画、強化会議実施内容などの見直しを行いました。それらの事業を円滑に進めるため、執行機関としての組織、人員配置及び事務所などの運営体制を適切に整備し、協会事務局の体制強化に努めました。平成30年度は強化、総務、財務、国際、普及育成の人員配置の工夫をし、それぞれの委員会において理事が監督することで運営がスムーズに行えるようになったため、令和元年度も引き続きその体制で運営を行っていきます。強化委員会においては、平

成30年度では部長、副部長を各部門（短距離、中・長距離、跳躍、投擲、マラソン）の選手から選出を行ったが、強化委員会の役員の兼務を増大させる要因となってしまったため、令和元年度より新たにアスリート委員会を設け、理事会との直接的な連絡を行う窓口設置を行い、代表者は理事会にも参加していただく方針をつくります。また、平成30年度は財務委員会と強化委員会においては、JPCとの連絡、事業報告などの提出物作成の業務を、各合宿の担当に配分することで、上手く回るようになってきました。令和元年度でも引き続き、各合宿毎に担当の振り分けを行い、報告作成をスムーズに行えるように努めていきます。その他、医科学委員会を立ち上げ、チームドクターを中心としてトレーナーとの連携を取ることで、選手たちを医科学的角度からサポートを出来る体制を整えます。併せて、女性アスリート委員会の立ち上げも行い、女性アスリート特有の悩みなどを積極的に受け入れ、情報を享受できる体制を整えます。